

ジャウイ誌『カラム』とマレー世界のムスリム ——ジャウイ文書研究会（2001年11月）の山本報告から——

西 芳実*

▼はじめに

2001年11月24日、上智大学で開催されたジャウイ文書研究会¹において、山本博之氏（東京大学）による報告「『Qalam』誌に見るシンガポールのムスリム同胞団の初期の活動について」が行われた。本報告は、その内容や意義はもちろん、その存在さえほとんど知られていなかった雑誌『Qalam』（以下『カラム』）を紹介すると同時に、『カラム』が重要な役割を果たしていたシンガポールのムスリム同胞団について、その活動の一端を明らかにしたものである。『カラム』自体の持つ資料としての重要性の他に、これまでこの地域の現代史研究でほとんど活用されてこなかった現代ジャウイ資料の活用を試みたという点でも意欲的な報告と評価することができる。また、マラヤとの連邦形成という形での非植民地化を支える政治思想がサバのムスリム住民の間で形成されていくにあたってシンガポールのムスリム同胞団が果たした役割の検討を試みるという、新たな研究の方向も示唆された。本稿では、こうした報告の内容を紹介すると同時に、『カラム』を用いた研究を行うことの意義について考えてみたい。

¹ 2001年4月発足。趣旨および活動状況については、「イスラーム地域研究」プロジェクト第2班（上智大学アジア文化研究所）の2001年度研究会報告のウェブサイト <http://pweb.sophia.ac.jp/~m-kisaic/2001meeting.html> で閲覧することができる。

▼アフマド・ルトフィと『カラム』

報告者（山本氏）が今回の報告の中でその存在を明らかにした『カラム』は、1950年7月にシンガポールで創刊され、1969年ごろまで発行されたジャウイ（アラビア文字でマレー語を表記する方法）によるマレー語月刊誌である。創刊者アフマド・ルトフィ（Ahmad Lutfi、本名 Shyed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus）は、バンジャルマシン出身のアラブ系ムスリムで、1920年代半ばにカイロのアズハル大学で学んだ経験を持つ。1920年代のアズハル大学といえば、イスラム改革運動の一つの中心であり、その頃急増していた英領マラヤやオランダ領東インドからのマレー系ムスリム留学生にその思想が多大な影響を与えたことで知られる。アフマド・ルトフィも、カイロのマレー人留学生団体である Al-Jamiyyah al-Khairiyyah による『Seruan Azhar』誌の発行に関わるなど、そうした留学生の一人であった。

シンガポールに居を移してからは、ワルタ・マラヤ紙の編集に関わったほか、ウトゥサン・ムラユ紙に勤めるなど、1930年代から1940年代に勃興したマレー語ジャーナリズムの世界に身を投じた。同時代には、生粋のマレー人としての立場からマレー人コミュニ

* 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程。

ティの後進性を乗り越える道を模索して活発な言論活動を展開し、マラヤにおけるナショナリズムの諸潮流の一つを担ったと後に評価されることになるザアバ (Za'ba, Zainal Abidin bin Abas) がいたが、アフマド・ルトフィはザアバと親しい交友関係を結び、アフマド・ルトフィ自身も 1946 年に『マラヤ連合』を執筆するなど、積極的に文筆活動を行っていた。そのアフマド・ルトフィによって設立されたカラム出版社から発行された最初の雑誌が『カラム』であった。

▼ 『カラム』の内容とその広がり

ついで報告者は、『カラム』の性格についてさまざまな側面から位置づけることを試みた。

まず、『カラム』の主要記事タイトルを分析し、『カラム』においてどのような内容が扱われていたのかを明らかにした。頻繁に取り上げられていたテーマとして第一に注目されるのは、インドネシアの動向である。シンガポールで発行されていたにもかかわらず、『カラム』の記事の大半はインドネシアについてのもの占められていた。創刊初期にはカリスマ的な指導者だったスカルノ大統領についての記事が多く見られ、その写真が付録としてつけられるなど、強い期待がスカルノ大統領に向けられていた。しかし 1950 年代後半になると、インドネシア最大のイスラム政党で、イスラムにもとづく社会の建設を志向していたマシュミ党の動向が頻繁に取り上げられ、それと入れ替わる形でスカルノ大統領に対する論調も批判的なものになっていった。

二番目に注目されるのは、科学技術や共産主義についての記事である。報告者によれば、この 2 つは当時のムスリムが抱えていた危機感と関連している。1 つは、宇宙開発などの紹介がしばしば行われているように、西洋近代の科学技術がめざましい進歩をとげていることを認めた上で、ムスリムが発展から取り残されてしまうのではないかとする危機感である。もう 1 つは、共産主義思想の影響のため、若い世代のムスリムに旧来の社会秩序を軽んじる人々がいることへの危機感である。これを解消するための 1 つの方法として生まれたのが若い世代にイスラムの教義を身につけさせるという発想であり、これとの関係でメッカやカイロにおけるマレー人学生の動向がしばしば紹介され、彼らを通じて中東のイスラム改革思想が持ち込まれていた。

では、『カラム』の読者はどのような人たちであったか。報告者は、『カラム』の記事の中で「祖国」が指す範囲に注目し、『カラム』誌が読者として想定していたのはシンガポールを含むマラヤのムスリムであったとした。一方、実際の読者については、『カラム』誌上で行われた「ムスリム同胞団」(後述)への参加呼びかけに反応した人々のリストをもとに、シンガポールやマラヤだけでなくタイ南部やボルネオ北部にまで広がっていたこと、そしてインドネシアにはいなかったことを明らかにした。

こうしたことを踏まえて、報告者は『カラム』の性格を、中東から発信される改革思想に支えられながら、当時すでに独立を果たし

ていたインドネシアにおけるイスラムの動向などを題材に、マラヤのマレー人を読者の対象として植民地都市シンガポールで発行され、マラヤだけでなくタイ南部やボルネオ北部のムスリムにも読まれていた雑誌であったと位置づけた。

このような性格を持った『カラム』誌上で参加が呼びかけられたのが、中東の改革思想に触発され、東南アジアのムスリムの置かれた状況を踏まえてこれを改革するという目的を持って 1956 年に結成された「ムスリム同胞団」(Persatuan Ikhwan Muslimin) であった。「ムスリム同胞団」はカラム出版社を連絡先とし、ムスリム同胞団をめぐる議論が『カラム』誌上で活発に行われ、以後、『カラム』はシンガポールのムスリム同胞団の機関紙とも言うべき役割を担うようになっていった。

報告者は、以上のように『カラム』を位置づけた上で、サバのムスリム原住民の政治思想が形成される過程を分析するための資料として『カラム』を活用する例を示した。ただし、これについては方針を示すのみで具体的な分析内容には踏み込まなかったため、その内容については後日を期したい。

▼『カラム』の意味

以下では、本報告で紹介された『カラム』の意味について、インドネシアを研究対象としている立場から若干のコメントをしたい。

『カラム』という雑誌の持つ広がりには、東南アジアにおいて政治共同体が構想されていく過程はもちろん、人びとのあいだに共同体

認識が形成される過程を対象とした研究を行っている研究者一般にとっても重要な示唆が含まれている。報告者によって明らかにされた『カラム』の特徴は、この雑誌の発行地(シンガポール)、読者対象(マラヤのマレー人)、関心が向けられている社会(インドネシア、西洋近代)、思想的背景の源泉(中東)、実際の読者(マラヤ、タイ南部、ボルネオ北部のマレー系ムスリム)のどれを取ってもきっちりとは重ならず、それぞれずれた形で広がっているという点にある。しかも、その領域的広がり、当時の政治共同体の範囲と比べてずれているだけでなく、その後に形成された政治共同体と一致しているわけでもない。

『カラム』の事例は、たとえば、単独でイギリスの植民地となっていたシンガポールで発行される雑誌を通じて、エジプトに起源を持つ改革思想にもとづいて書かれたインドネシアにおけるイスラムの動向分析を読むことによって、マラヤ連邦に居住するマレー人が自らのあり方を考えていた、ということの意味している。定期刊行物の読者や内容がその発行地に規定されない広がりを持ちうるということは、海外の雑誌や新聞を自由に購読でき、インターネットを用いれば世界中にアクセスすることができる現代においてはごくあたりまえのことに思われる。しかし、発行者が想定する読者の範囲や実際の読者の広がりが発行地やその定期刊行物が扱う対象の範囲と必ずしも一致していないということは、これまで個別の研究において定期刊行物を扱う際に十分に意識されてきたのだろうか。

こうした視点の重要性は、ベネディクト・アンダーソンが提唱した「想像の共同体」論を通じて一般に受け入れられている出版資本主義の議論、とりわけ、定期刊行物が人々の共同体意識の形成に果たす役割についての議論と照らし合わせた場合、いっそう意味を持つように思われる。

オランダ領東インドを例にとれば、アンダーソンは、植民地国家の枠組みに添った形で存在した教育や行政の「巡礼圏」を通じて知識人が「われわれインドネシア民族」という意識に目覚め、自らの考えを定期刊行物などを通じて人々に普及させていき、このことがインドネシアという範囲での国民国家の形成を裏付けた、とした。しかし具体的な議論においては、定期刊行物などを通じて知識人の議論に実際に触れた人々がオランダ領東インドの範囲にあまねく存在していたのか、あるいは、そうした人々が本当にオランダ領東インドの範囲を越えていなかったのか、といった検討は十分になされていない。また、これらの議論を受け入れた人々がそこからどのような考えを持つにいたったのかという問題についても関心が向けられていない。このため、インドネシアという範囲での国民意識の形成と普及を自明のものとした議論であるという印象を免れない。

実際は、『カラム』のような雑誌のあり方も、定期刊行物の一般的な姿の1つであると言えるだろう。そうであるならば、アンダーソンのような国民意識の形成の論じ方が一面的なものであることはもはや明らかであり、かわ

って、重なりとずれをそれぞれに持つさまざまな範囲で行われていた来るべき共同体をめぐる議論の多様なあり方、そしてその読まれ方を検討することが必要であることがわかる。

ここであらためて『カラム』に目を戻してみれば、『カラム』の読者は、シンガポール、マラヤ、そしてタイ南部、ボルネオ北部に広がっていた。本報告で読者がいないとされたインドネシアについても、当時、中央政府への反乱を起こすまでに先鋭化していたイスラム国家建設運動の指導者たちがシンガポールを情報収集や他地域の運動指導者たちとの交流の場としており、実際にカラム出版社を訪れたインドネシアの運動家もいた。インドネシアは単に記事の素材を提供していただけでなく、インドネシアの人々にとって『カラム』がどのような意味を持っていたのかという問いも十分に成立する。

こうした『カラム』の特質は、『カラム』という一つの文献に異なる地域を専門とする研究者がそれぞれに資料としての意義をみいだせるということの意味している。また同時に、さまざまな地域にまたがる広がりを持つ『カラム』の内容を特定の地域の研究者だけで十分に理解することには限界があるということでもある。『カラム』は、異なる地域を専門とする研究者がそれぞれの知識を持ち寄ることによって各自の地域についての理解を深めるという共同作業を、一つの文献を読むことを通じて可能にする。この点で『カラム』は、東南アジアの人々だけでなく、私たち研究者をつないでくれる文献といえるだろう。